斎王まつり

第三十二回　三重県明和町

よみがえる　平安の都　斎宮

平成26年

6月7日（土）
雨天の場合中止

前夜祭 17時～21時
開会式・斎王他出演者披露
特別ゲスト/民族楽器演奏家　あぱっち宮原
和太鼓奏者　的場 凜

斎王市 15時～21時
斎宮歴史博物館会場

6月8日（日）
雨天の場合中止

禊の儀・斎王群行 13時～15時
上園芝生広場～斎宮歴史博物館
協力参加/皇學館大学雅楽部の皆さん

斎王市
アトラクション 10時～15時

実はそれ、ぜんぶ三重なんです！

三重県観光キャンペーン
2013.4～2016.3

配役

斎王（さいおう）

伊藤　暁美
（菰野町）

子供斎王

岡田　心海
（津市　成美小）

舞人（まいびと）

鎌田　礼規
（津市）

鎌田　怜奈
（津市）

溝川　雄哉
（松阪市）

近衛使（このえつかい）

河村　絵里香
（伊勢市）

中西　麻佑
（玉城町）

風流傘（ふうりゅうがさ）

木本　博文
（伊勢市）

中村　和人
（伊勢市）

野上　但治
（明和町）

斎宮十二司官人

中村　幸美
（明和町）

倉田　進
（津市）

検非違使（けびいし）

中西　功
（玉城町）

井手阪　徳久
（明和町）

山本　泰広
（松阪市）

與丁（よちょう）

野田　節雄
（明和町）

協力参加

皇學館大学
雅楽部の皆さん

藤原　万凜
（明和町）

水門　瞳
（明和町）

来光　美希
（松阪市）

内侍（ないし）

小林　明希子
（四日市市）

女別当（にょべつとう）

前田　彩乃
（明和町）

高木　美穂
（伊勢市）

采女（うねめ）

廣垣　利紗
（伊勢市）

島田　優希
（津市）

川村　寿里
（伊勢市）

井上　摩美
（津市）

命婦（みょうぶ）

三留　紀子
（清須市）

山下　貴代
（桑名市）

向井　麻梨
（橿原市）

女孺（にょうじゅ）

中井　美波
（四日市市）

倉谷　美香
（熊野市）

采女（うねめ）

古澤　有梨
（長岡京市）

小林　司
（玉城町）

女孺（にょうじゅ）

童・童女　出演者（順不同）

水千（すいかん）

山中　美来　伊藤　明花　浦田　真侑　山本　そら　喜多　雪月　田畑　奈那子　松嶋　乃愛

宮本　侑奈　金田　京示朗　長谷川　莉瑠　井手坂　拓弥　白井　大暉　山下　詩織　三田　空来

千早（ちはや）

辻　吏瑠花　荒井　七穂　中島　はづき　小畑　愛菜　龍田　ほのか　溝川　怜香　稲垣　紀花

西田　百花　辻井　梨湖　中井　心結　前田　優衣　前田　晴菜　浦田　雛　田野上　由唯

安井　翠　石井　有梨愛　出口　雪菜　上田　芽衣　相崎　桃々子　村田　萌　山下　朱莉

あこめ

北原　未也美　西田　成美　中西　加奈　辻　樹羅　中島　のどか　山口　萌衣　上西　郁菜

中尾　実佑　金田　摩吏子　中　美咲　小宮　早稀　西口　寿音　小久保　衿沙　山本　衣恋

第三十二回　斎王まつりを迎えて

斎王まつり実行委員会　広報班

第32回斎王まつりは「よみがえる　平安の都　斎宮」をサブテーマに開催されます。

昨年は、お伊勢さんも第62回神宮式年遷宮を迎え各地でいろんな催しが開催され、あらためて国民の遷宮への関心の高さが証明されました。

式年遷宮は、「今から1300年前に、天武天皇がお定めになり、持統天皇の4年（690年）に第一回目のご遷宮が行われました。」

「今から1300年前…」どこかで聞いたフレーズ。斎王まつり前夜祭で斎王登場シーンのナレーションです。

斎王さまもこの頃…674年　天武天皇が大来皇女を初代斎王として伊勢（斎宮）にお遣わしになられました。

式年遷宮と斎王との深い関わりは、言うまでもありません。

ご来場いただいた皆さまには、今から1300年前からの式年遷宮と斎王さまをご記憶にとどめていただければ幸いです。

二日間を存分にお楽しみください。

6/7(土)（雨天中止）

斎王市　15：00～21：00

前夜祭　17：00～21：00
斎宮歴史博物館会場
開会式
特別ゲスト
民族楽器演奏家　あばっち宮原
和太鼓奏者　的場　凜
斎王他出演者紹介

6/8(日)（雨天中止）

斎王市

アトラクション　10：00～15：00
斎宮歴史博物館会場

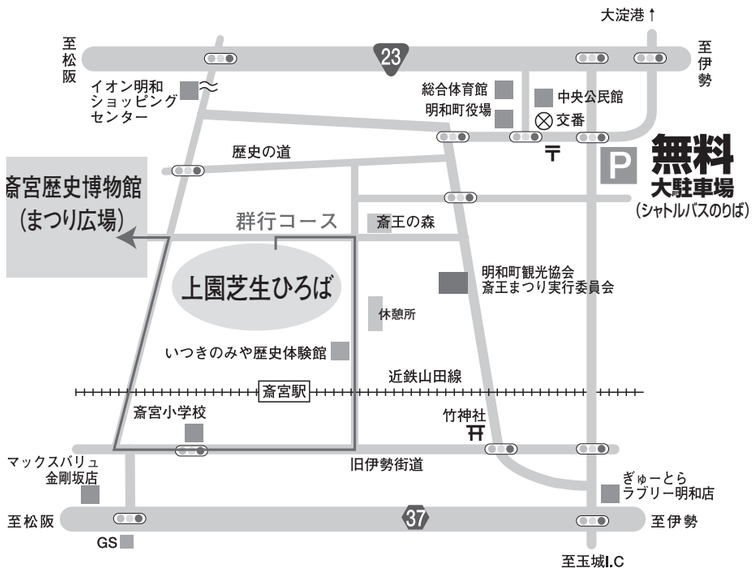
禊の儀・発遣の儀　13：00～
上園芝生ひろば（斎宮駅北側）
協力参加
皇學館大学雅楽部

斎王群行
上園芝生広場から
斎宮歴史博物館会場まで

社頭の儀　14：45～15：00

もくじ

斎王まつり配役…… 2
斎王まつり童・童女出演者…… 4
斎王をひもとく（その八）…… 6
斎王一覧…… 8
斎宮跡の発掘調査…… 9
斎宮と海～大淀のわたりのこと～… 11
いつきのみや歴史体験館…… 13
斎王讃歌…… 14
『小町』とは …… 15
図書の紹介 / 実行委員会組織体制 … 16
斎王まつり実行委員会活動…… 17
群行衣裳…… 18
フォトコンテスト…… 20
第31回斎王まつりの思い出 … 22



斎王をひもとく（その八）

斎王への道

ふるさとの語り部　山川　充造

神祇官の中臣氏がその功績により藤原氏と枝分かれして百年程になる。その一族も南家・北家・式家・京家を名乗ってから、ある時は叛き合い乍らも、朝廷との血縁という現実から生まれた中心には事あれば都の後ろ盾があり朝廷の存在があった。時代によっては一族の権力の交代があったものの、反論し難い全ての時代の経過が文化の変遷となって「いま」が出来ていった。一時期我が国に平安時代と呼ばれた高貴な時代が長く続いた。それは、藤原時代とも呼ばれ華やかな対岸花の山を見る思いの時代を過ごした佳き時代であった。

藤原一代の中で式家の百川の行動力は表に裏に群を抜いており、その事は朝廷にも篤い信頼となって認められていった。しかし、その百川も宝亀十年七月、天寿と伝えるにはいささか早い四八才の生涯を閉じた。

天応元年四五才の山部皇太子が即位し、桓武天皇となり、比叡山で修行の身にあった早良親王が還俗して皇太子になった。都にあった酒人内親王は、いつの日か桓武天皇に迎えられており、後に斎王に選ばれる朝原内親王が生まれ育っていた。

井上、酒人、朝原と、三代も親から子、孫へと続いた斎王は歴史の上では初めてであった。

平城遷都から七十余年、その間七代の天皇には短期間の遷都の繰り返しがあった後、延歴三年十一月に天皇は京都長岡京に遷都した。

史書には「水陸の便ありて都を長岡に建つ」とあり、歴代に嫌われ続けた平城宮は「水」つまり、飲料水や水路交通、陸路交通にも問題が多かったように思われる。

延歴四年九月、七才になっていた朝原内親王の群行儀式は平城京跡から出発され、すでに長岡京に都を移していた父・桓武帝と母・酒人妃が異例の平城京跡まで見送る儀式があった。この年、伊勢神宮は遷宮の年にあたり、折しも、伊勢地方は台風による大洪水に見舞われ、七日に奈良を出発した斎王群行も、台風の中を斎宮に無事に到着したのだろうか。

確かな記録としては残っていないが、斎王は三日程遅れて遷宮儀式のために宮川を渡り、「離宮院」に入った。当時の離宮院は、渡遇郡沼木郷高河原（現在の伊勢市一之木一丁目、月夜見宮の付近）にあり遅れながらも幼い朝原斎王は皇太神宮の御杖代としての務めを果たした。

天皇が廃平城京にまだ滞在中の隙を待っていたかのように、長岡建都の指揮を預かっていた藤原百川の甥藤原種継が射殺された。

種継は、叔父百川にも勝る行動力の持ち主で、天皇の信頼あつい重臣であった。急遽都に戻った天皇は、事件の犯人を即座に割り出し、早良皇太子一味による謀反と決められ、廃皇太子にされた上に、淡路島送りとなった。無実を訴える機会も与えられず、早良親王は島送りの駕籠の中で絶食による無念の最後を遂げた。朝廷の中にはこのようにして絶えず不安な要素をふくんでいた。

延歴七年、天皇は藤原百川の娘で夫人の旅子を失い、続いて母の中宮・高野新笠が亡くなり、延歴九年には皇后・乙牟漏が三一才で崩御され、相次ぐ親族の死が天皇の心の中に因縁の思いを宿したことは、しばらく後になって表面化してくる。

乙牟漏皇后については「穏和・美姿」と短く伝えられおりいろいろな記録を総合すると酒人妃の方が六才年上であったことが資料に残されており、性格は全くの対照的な方たちであった。

翌年八月に伊勢神宮は盗賊による放火事件があり、神殿の相当数が焼ける中を正殿から大きな火の玉が光明を放って飛び出したと伝えられる。

都・長岡京では、長雨による洪水が繰り返し起こり、平城京の頃の怨念を引きずるように依然として怨霊・妖怪の噂が各地に飛び交い早良皇子の怨霊・祟り説には各神社・仏閣での慰霊・祈祷が続けられた。

遷都十年の間、不幸なことばかり続いた。

怨霊におののき苦しむ朝廷に長岡京はついに棄てられることになった。

京都に都が出来てから千三百年、いまも祭り行事に（遷都）の文字が使われた。山深く、沼地の多い山背国に平安四百年の都を築き、近代まで続いた京の都の市民感情は、単に都が移ったのではなく連綿と都を維持してきたその心意気が感じられる。膨大な費用と人数をつぎ込んで造られた平安京の全てが、人々を圧倒する都としての規模歴を持ち、中国の長安をまねた立派なものであった。

竹の都の斎宮寮にあった朝原斎王は、十二年の斎王の務めの中に、平城京・長岡京・平安京の三つの都の繁栄を経験した群行の繰り返しであった。幼少の頃の思いが、いま目を見張るばかりの甍連なる京の都に落ち着いた芳紀十八歳の目にはどのように映り、どんな感慨を持って眺めた事であろうか。

朝原斎王の退下の理由は定かではなかった。

都に帰ってからの皇女は、父・桓武帝と母・酒人妃の限りない愛情に包まれた毎日であった。翌年には望まれて「安殿」皇太子（後の（平城天皇）の后に迎えられた。

この頃、斎王が三節歳（六月と十二月の月時祭、九月の神嘗祭）に参向するための宿泊する離宮院が沼木郷高河原（現在の一之木一丁目・月夜見宮付近）から、渡遇郡湯田郷字西村（度会郡小俣町本町、今の離宮院跡）に移築された。理由は低地で水難が多い為であり、太古から支配者を常に脅かすものは水難とか地震といった天災と伝染病であった。

都では何人かの妃一人として酒人内親王はすでに四十歳代になっていた。天性の美貌と明るく勝ち気な日常は周囲に年齢を感じさせるものはなく、自由奔放な性格は七六歳で薨去されるまで貴族男性の輪の中でお祭り騒ぎが続いた。それら日常を認められてきたものに、母・井上以来皇族のなかでも誇り高い血を受け継ぎながら、数奇な運命に弄ばれ皇位継承順位の低かった天皇の妃の位置に対し不満があったのかも知れない。

斎王一覧

斎王の伊勢滞在期間は短くて二年、長い人では三十一年という例があり、年齢は五歳から十五歳の少女に集中しており、最高で群行時三十二歳という斎王もいます。

＊は女王（天皇の娘以外の皇族女性）
〔　〕内は実在の確認できない斎王
○は斎宮に群行した斎王
△は斎宮に群行しなかった斎王

時代	歴代斎王	在任期間（年）	天皇	西暦	歴史上のできごと
伝説の時代の斎王	豊鍬入姫（とよすきいりひめ） 倭姫（やまとひめ） 五百野（いおの） 〔伊和志真〕（いわしま） 稚足姫（わかたらしひめ） 荑角（ささげ） 磐隈（いわくま） 菟道（うじ） 酢香手姫（すかてひめ）				
飛鳥	○大来（おおく）	六七三～六八六	天武	（六七一） （六七四）	壬申の乱 大来皇女　大和の泊瀬から伊勢に向かう群行の確実な初例（日本書紀）
	○当耆（たき） ○泉（いずみ） ○田形（たかた） 〔多紀〕（たき） 〔円方〕（まどかた）＊ 〔智努〕（ちぬ）＊ ○久勢（くせ）	六九八～七〇一 七〇一～七〇六 七〇六～？ ？ ？ ？	文武 文武 文武～元明 元明 元明 元正	（六九四） （七〇一） （七〇八） （七一〇） （七一三）	藤原京に遷都 斎宮司が寮と同格になる　斎宮官制の初見（続日本紀） 和同開珎鋳造 平城京に遷都 古事記撰上
奈良	○井上（いのうえ） ○県（あがた）＊ ○小宅（おやけ）＊ ○山於（やまのうえ）＊ ○酒人（さかひと） ○浄庭（きよにわ）＊ ○朝原（あさはら） ○布勢（ふせ） ○大原（おおはら） ○仁子（よしこ） ○氏子（うじこ） ○宜子（よしこ）＊ ○久子（ひさこ） ○晏子（やすこ） ○恬子（やすこ） ○識子（さとこ） △掲子（ながこ） ○繁子（しげこ） ○元子（もとこ）＊	七二一～？ ？～七四九 七四九～？ 七五八～？ 七七二～？ ？～七九六 七九七～八〇六 八〇六～八〇九 八〇九～八二三 八二三～八二七 八二七～八三三 八三三～八五〇 八五〇～八五八 八五九～八六六 八七七～八八〇 八八一～八八四 八八四～八八七 八八九～八九七	聖武 孝謙 淳仁 光仁 桓武 桓武 平城 嵯峨 淳和 淳和 仁明 文徳 清和 陽成 陽成 光孝 宇多	（七二〇） （七二八） （七五一） （七五九） （七八四） （七九四） （八〇五） （八〇六） （八一四） （八三九）	日本書紀撰上 斎宮寮の拡充整備　官人の定員と官位が決まる（類聚三代格） 東大寺大仏開眼供養会 万葉集編纂 長岡京に遷都 平安京に遷都 最澄帰国　比叡山に延暦寺建立 空海帰国　高野山に金剛峰寺建立 多気の斎宮を度会の離宮（小俣町離宮院跡）に移す（類聚国史） 度会の斎宮（離宮院）の官舎百余棟焼失　斎宮を多気に戻す（続日本後紀）
平安	○柔子（やすこ）	八九七～九三〇	醍醐	（八九九）	遣唐使廃止
	○雅子（まさこ） △斉子（きよこ） ○徽子（よしこ） △英子（はなこ） ○悦子（よしこ） ○楽子（やすこ） △輔子（すけこ） ○隆子（たかこ） ○規子（のりこ） △済子（なりこ）＊ ○恭子（たかこ）＊	九三一～九三五 九三五～九三六 九三六～九四五 九四五～九四六 九四七～九五四 九五五～九六七 九六八～九六九 九六九～九七四 九七五～九八四 九八四～九八六 九八六～一〇一〇	朱雀 朱雀 朱雀 村上 村上 村上 冷泉 円融 円融 花山 一条	（九〇五） （九一二） （九一七） （九三五頃） （九三八） （九七四） （九九五頃）	古今和歌集撰上 斎宮寮の失火（扶桑略記） 延喜式完成　斎宮に関する細則も納められる（延喜式） この頃竹の都と呼ばれる（大和物語） 土佐日記 重明親王女　徽子女王群行（貞信公記） 斎宮　隆子女王疱瘡により斎宮寮にて死亡（日本紀略） 枕草子
	○当子（まさこ） ○嫥子（よしこ）＊ ○良子（ながこ）＊ ○嘉子（よしこ） ○敬子（たかこ）＊ ○俊子（としこ）＊ ○淳子（あつこ） ○媞子（やすこ） ○善子（よしこ） ○姸子（あいこ） ○守子（もりこ）＊ ○妍子（よしこ） ○喜子（よしこ） △亮子（あきこ） ○好子（よしこ） △休子（のぶこ） ○惇子（あつこ） △功子（いさこ） ○潔子（きよこ）	一〇一二～一〇一六 一〇一六～一〇三六 一〇三六～一〇四五 一〇四五～一〇五一 一〇五一～一〇六八 一〇六九～一〇七二 一〇七三～一〇七七 一〇七八～一〇八四 一〇八七～一一〇七 一一〇八～一一二三 一一二三～一一四一 一一四二～一一五〇 一一五一～一一五五 一一五六～一一五八 一一五八～一一六五 一一六五～一一六八 一一六八～一一七二 一一七七～一一七九 一一八五～一一九八	三条 後一条 後朱雀 後冷泉 後冷泉 後三条 白河 白河 堀河 鳥羽 崇徳 近衛 近衛 後白河 二条 六条 高倉 高倉 後鳥羽	（一〇一〇頃） （一〇一六） （一〇四〇） （一〇八六） （一一二三） （一一五六） （一一五九） （一一六七） （一一七二） （一一八五） （一一九二） （一二一一）	源氏物語 道長が摂政となる　摂関政治 斎宮歌合せ（類聚歌合） 白河上皇の院政始まる　摂政・関白無力化 斎宮石名取り歌合（金葉集等） 保元の乱 平治の乱 平清盛　太政大臣就任 斎宮惇子内親王　斎宮寮にて病死（百錬抄） 平家滅亡 源頼朝　征夷大将軍　就任　鎌倉幕府開く 承久の乱　朝廷の力衰退
鎌倉	○粛子（すみこ） ○熙子（ひろこ） ○利子（としこ） ○昱子（てるこ） △曦子（あきこ） ○愷子（やすこ） △犉子（まさこ） △懽子（よしこ） △祥子（さちこ）	一二一九～一二二一 一二二一～一二二二 一二二二～一二三二 一二三二～一二四二 一二四二～一二四六 一二四六～一二七二 一二七二～一二八一 一三〇六～一三〇八 一三三〇～一三三一 一三三三～？	順徳 後堀河 四条 後嵯峨 亀山 後二条 後醍醐 後醍醐	（一二一九） （一二二一） （一二二四） （一二八一） （一三一四） （一三三一） （一三三三） （一三三四）	土御門 承久の乱　朝廷の力衰退 文永の役　元寇 弘安の役　元寇 正中の変 元弘の変 鎌倉幕府　滅亡 建武の中興

参考　斎宮歴史博物館総合案内

平成25年度の斎宮跡の発掘調査

平成２５年度　史跡斎宮跡発掘調査区位置図

斎宮跡の発掘調査は昭和四五（一九七〇）年に始まり、すでに四〇年以上が過ぎました。これまでの調査で史跡斎宮跡はどこまで解明されてきたのでしょうか。そして、今も続く発掘調査は、斎宮の何を明らかにしようとしているのでしょうか。

斎宮跡、四〇年の発掘成果

斎宮跡での四〇年間にわたる発掘調査は、斎宮跡の様子を次第に明らかにしてきましたが、その中で、もっとも大きな発見の一つは、平安京のような碁盤の目状に区画を区切る道路が確認されたことでした。道路は、幅五〇尺（一四・八ｍ）を基本として東西南北に走ります。これは現代の自動車道路の四車線分に相当する幅の広さです。さらに、この道路によって囲まれた一つの区画は、一辺の長さが四〇〇尺（一一八・四ｍ）あります（※注）。これは造営時の都である長岡京と同じ規格です。

では、この各区画の中には何が建っていたのでしょうか。またそれぞれの区画はどのような役割を持っていたのでしょうか。

現在の竹神社の周辺では、斎王の宮殿である「内院」が確認されました。長大な塀で囲まれた空間の中に、格式の高い建物が確認されたのです。そして、この場所からは、高級な焼き物で緑色の美しい釉薬がかけられた「緑釉陶器」が多数出土したことなどにより、ここが斎王の宮殿跡「内院」であることが分かりました。

また、斎宮寮の役人が政務や儀礼を行う「寮庁」も明らかになりました。北側、東側、西側の三方で庭を取り囲むように建物が配置された場所が確認されたのです。３つの建物はいずれも格式の高い建物で、そのことから斎宮寮の長官らが儀礼を行う場であると考えられました。この場所は現在、平安時代の建物の復元工事を行っています。

さらに、「寮庁」の北東には、倉庫群が確認されました。一つの区画の中に整然と一六棟の建物が並ぶことが確認されたのです。一つの建物は、東西一二ｍ、

平成25年度発掘調査風景

復元された幅50尺の道路

南北四・八mの大きさで、面積は五七・六㎡あります。この倉庫は、

斎王をはじめ、斎宮にいる人々の日常生活を支える品々や、役人の給料となる物品を保管していたものだと考えられています。

※四五〇尺、四一〇尺の区画もあります。

平成二五年度の調査

倉庫群はこれまで、一つの区画のみが知られていました。ところが、その西側の区画にも倉庫群があるのではないか、ということがその後の調査で明らかになってきたのです。平成二五年度の発掘調査では、その西側区画の倉庫群を確認するために発掘調査を実施しました。すると、東西に一二m、南北は推定四・八mの建物を確認し、これまでの発掘調査の結果に符合するものでした。

これまでの調査によって、倉庫群が二つの区画にわたって広がっていることが確認できました。しかし、また新たな謎が出てきました。この倉庫群はどうして二つの区画にわたって広がっているのでしょうか。発掘調査終了後、この謎の解明に取り組みました。すると、どうやら、この二つの倉庫群は時期が違うことが分かってきたのです。この背景には、斎宮をめぐる古代史の動きが隠されていたのです。

平城京から長岡京、さらに平安京へと遷都を行った桓武天皇は、長岡京の造営工事に着手した翌年、斎宮の大々的な造営に着手します。これまでの発掘調査で明らかになった碁盤の目の道路や区画は、概ねこの時に造営されたものだと考えられます。しかし、四〇年後の天長元（八二四）年、斎宮は突如として離宮院（現在の伊勢市小俣）へ移転します。移転の背景には、伊勢神宮に対する朝廷側の様々な思惑があったと考えられています。ところが、一五年後の承和六（八三九）年、移転先の「斎宮」が火災にあい、に帰します。そのため、斎宮は再び現在の明和町の地へと戻り、建物が再建されました。

斎宮跡の二カ所の倉庫群は、時期の差があることから、東側は離宮院へ移転前の、西側は再び戻ってきてからの倉庫群にそれぞれあたる可能性も考えられます。今後出土資料やこれまでの成果を整理し、建物群の実態を解明したいと考えています。

このほか、今年度の発掘調査では、もっとも北側の道路側溝が発見され、さらにその北側から掘立柱建物が発見されました。このことから、平安時代の斎宮の建物は、碁盤の目の区画の内側だけに立ち並んでいたのではなく、その外側にも広がっていたことが分かってきたのです。

四〇年以上にわたって続けられてきた発掘調査は、今も斎宮跡の姿を明らかにし続けています。斎宮歴史博物館では、発掘調査について現地説明会や調査報告会を開催しています。また、小・中学校の体験発掘や中学生職業体験の受け入れ、さらに「発掘体験ウィーク」などを行っています。

「寮庁」で進められている復元建物の建設工事と合わせて、これからも斎宮歴史博物館の行う斎宮跡の発掘調査にご注目ください。

（斎宮歴史博物館　調査研究課）

斎宮歴史博物館ホームページ
http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/saiku/

斎宮と海 ～大淀のわたりのこと～

榎村　寛之

本年の斎宮歴史博物館の特別展は「伊勢と熊野の歌」と題して、平安時代の二大聖地だった伊勢と熊野に関わる和歌文学をテーマにする予定です。

そのため、今回の「斎王まつり」では、斎宮にゆかりの歌で、ぜひとも皆さんにも覚え得ていただきたいものをご紹介いたしましょう。それは「大淀」に関わる二首の歌です。

大淀の松はつらくもあらなくに
うらみてのみもかへる波かな

大淀のうらたつ波のかへらずは
変はらぬ松の色を見ましや

一見よく似ていますね。

でも意味は全然違います。

1　斎宮から東国に向かう湊、大淀斎宮のあたりは東国への玄関口だった、というと、えっ？、と思われる方もおられるのではないでしょうか。正確には、現在「おいず」としても知られている「大淀」が、その港だったのです。この地は平安文学の中では「おおよど」として現れます。

10世紀に成立したと見られる古典文学『伊勢物語』の第69段では、狩の使（天皇の食膳に上がる鳥を捕る鷹狩を行う勅使）として斎宮を訪れた在原業平とされる「男」が、斎王らしき女性と不思議な一夜を過ごしたのち、斎宮から尾張の国に旅立ちます。そして第70段では、狩の使を終えて、「大淀のわたり」に帰ってきて、斎宮のわらはべ（斎王に仕えていた童）に呼びかけるのです。

見るめかる方やいづこぞさほさして我に教へよあまの釣舟

海松（海藻「ミル」）の芽を刈る潟はどこなのか、舟に棹を差して私に教えて欲しい、海士の釣り舟よ（じつは、この歌には「私が見たい所〔恋人のいる所、つまり斎宮の方角〕はどこなのか、棹を差し伸べて教えておくれ、海士の釣り舟よ」という意味が隠されています）。

「わたり」は「渡り」ですから、大淀は伊勢湾を渡り、尾張に向かう港だったということがわかります。

そして第72段に、先に触れた歌が出てきます。

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる波かな

有名な大淀の松のように「待つ」のがつらいというわけではないのだけれど、あなたは（海から寄せては返す）波のように浦を見（うらみ）ただけで都に帰るのね、私も「うらみ＝浦見＝恨み」ます。

斎宮にいた女（斎王のイメージですね）が男に送った歌です。

大淀の町は斎宮と同じ明和町の、海岸線にあります。今は静かな港とキャンプ場の町ですが、八月初頭の祇園祭の時には大花火大会があるなど、賑やかさを秘めた所です。

そして平安時代には「淀」で、これらの歌にもあるように「潟」で「浦」でした。つまり波の穏やかな入江（潟湖）なわけで、それは当時の感覚では絶好の港の地形だったのです。

2　禊の場所としての大淀

さらに大淀は、斎王が九月神嘗祭と十一月新嘗祭の前の月の最終日（晦日）に御禊を行う所でもありました。前者は神宮で、後者は斎宮で行うもっとも重要な祭で、そのために海まで出向いて禊をするのです。海での禊は、この時のほかには、斎王が帰京する途中、難波津（大阪湾）で行うだけなので、非常に重要な儀式だったことがうかがえます。大淀はそんな禊の場所だったのです。十世紀に編さんされた斎宮の総合的な法律集『延喜斎宮式』には、この禊の場所については「尾野湊」とあり、尾野、つまり河口に砂が堆積して出来た長い砂州に守られた穏やかな入り江が、禊が行われる所だったと思われます。

斎王が海で禊を行うことで思い出されるのは、『日本書紀』垂仁天皇二十五年の伊勢神宮の創始記事の中で、伊勢が「常世の浪の敷浪寄する国なり」と記されていることでしょう。『日本書紀』の中では、海の向こうのパラダイス、常世の国から波が寄せてくる麗しい所、というのが神宮のある地、伊勢のイメージだったのです。ところが伊勢神宮の祭では、海産物は多く使われますが、海を意識したものはあまりありません。また、度会の地は「百舟の度会」とも言われますが、当時の港の場所はよくわかりません。伊勢神宮の祭祀に関わる最も身分の高い人、つまり斎王が港で行う儀礼、それは大淀の禊だったのです。

伊勢神宮が、東国への海上交通の拠点で、海の渡る目印となる太陽への信仰の広がりを背景に成立したことはほぼ疑い無いでしょう。その重要な拠点の少なくとも一つは、度会郡ではなく、隣接する多気郡の大淀だったと思います。こんなに「波」が語られ、しかも斎王が関わる所は大淀だけなのですから。

そして十世紀の斎王であった斎宮女御こと徽子女王（九二九～九八五）が詠んだのが、二首目の

大淀のうらたつ波のかへらすは
変はらぬ松の色を見ましや

の歌です。伊勢物語の歌を踏まえていますが、内容はずいぶん違います。

この歌は、大淀の浦に立つ浪がかえってくるように伊勢に戻ってこなければ、変わらない松の緑を見ることなんかできなかったでしょうね、という意味です。

元・斎王だった徽子女王は、村上天皇の女御となり、後に自らが産んだ娘の規子内親王とともに再び伊勢に下りました。娘の斎王の禊に立ち会い、かつてと変わらない大淀の海に再会した感慨を詠んだ歌なのです。こうした歌を介して、大淀は斎王の禊に関わる地としても知られ、歌枕（和歌に詠まれる名所地名）として貴族社会に広く知られていきます。そのキーワードは「波」だったのです。

大淀は東国への港とともに、常世の波が寄せる仙境。だから斎王の禊が行われたのかもしれません。

（写真は大淀の薬平公園にある三代目薬平松）

おわりに

斎宮で最古の「いろは歌」を記した最古の土器が見つかった、という話は、この冊子をお読みの方ならご存じなのではないでしょうか。ひらがなを使いこなす女性たち、しかしそのひらがなには、美しいものと上手くないものがあります。つまり、ただいま練習中、という感じのものも見られるのです。これはこの地域で採用された女官の努力の跡のように思われます。

そして斎宮という、都を移してきたような華やいだ空間の周りの地名は都にも知られるようになり「大淀」「竹川」「円方」など「歌枕」として定着していきます。斎宮を媒介として、都と地域の情報がクロスしているようすがよくわかります。

熊野古道が世界遺産に登録されて十周年の今年、多くの都人が訪れ、都の文化を定着させていった伊勢と熊野の二つの「聖地」。今年の展覧会では、斎宮をめぐる歌と熊野をめぐる歌を紹介しながら、王朝の雅が地方に広がっていく一端を追いかけてみようと思います。

いつきのみや歴史体験館を ご紹介します!!

めぇめぇです。

こんにちは、めぇめぇです。最初に自己紹介をするね。めぇめぇはいつきのみや歴史体験館のイメージキャラクターとして活躍しています。羊形硯（ひつじがたすずり）といって、とっても珍しい硯をかわいくデザインして生まれたのがめぇめぇです。いつも筆を持って字のお勉強をしています。

今日は、めぇめぇがいつきのみや歴史体験館を紹介するね。

電車で来ると近いので、ちょっとだけ電車に乗ってみた。近鉄の斎宮駅で降りて、とことこと歩いて約3分。踏切を渡ると見えてくるのが、いつきのみや歴史体験館!!大きな木造の建物です。これは『寝殿造（しんでんづくり）』といって、今から1，000年以上前の平安時代に身分の高い人、貴族が住んでいた建物をイメージして建てられたとか。

中にはいってみよう！木目がどこをみても見られるとってもキレイな建物です。靴を脱いで、4段だけ階段を上って「よいしょっ…と」めぇめぇ上がるの大変なの～、誰か～っとバタバタと騒いでみたら、受付のお姉さんが手伝ってくれた!!「ありがとう」お礼をして、さぁ館内へ。見えてきたのは『葱華鬘（そうかまん）』斎王が京の都から来る際に500人くらいの行列でこの輿（こし）に乗って来たんだって。めぇめぇも乗りたい!!大きすぎてお姉さんに止められちゃった…残念。みんなは乗って写真撮ってるいいなぁ。よしじゃあ次に何しようかなぁ～。2つも発見したよ。これは『盤双六（ばんすごろく）』と『貝覆（かいおお）い』です。まずは盤双六から紹介するね。盤双六は、平安時代の貴族はもちろんだけど、一般の庶民にもとっても流行った遊びで、マス目が上下に作ってある盤を使って、黒と白の15個のコマをサイコロの出た目にそって進める遊びです。楽しそう!!めぇめぇもやりたい!!2人1組で遊ぶみたい…誰か相手して～。

貝覆いはどうやって遊ぶのかなぁ～貝が円になって置かれてて、真ん中に1つ貝があって、これはお題なんだって。お題の貝の模様や、色、形をよく見て、周りの貝の中から、同じ貝をさがすの。貝覆いの貝は、はまぐりです。2枚貝と呼ばれていて、ピタッと合う貝はたった1つしかないのが特徴で、いろんな色や模様・形がすべて一緒。対になる貝を探して遊ぶんだって。めぇめぇもやる～!!次に進んでください。何でもやりたがりのめぇめぇ、ちゃんと紹介しましょう。

次は、『小袿（こうちき）』平安時代の女性の装束です。赤いのとピンクなのと2領あって単（ひとえ）と合わせて2枚一緒に着るみたい。十二単の簡略化したものを洋服の上から羽織って写真に撮れば、思い出になるし、無料の体験だから気軽にできて楽しい。

えっと、次は『お香』体験です。斎王さまも愛用された、王朝人のたしなみ。いろんな種類の香木や原料から調合して、自分の香りを作って楽しまれたそう。その原材料の香りを10種類くらいあるので、嗅いでみよう。香りを聞くっていうんだって。

『琵琶（びわ）と篳篥（ひちりき）』雅楽器の展示。琵琶は大きくて持つの大変そう。篳篥は縦笛で音を出すのが大変なんだって。体験館の1／10模型の展示もあるよ。木でできているのがよくわかる。釘とか金物使ってないのがすごい。次は回廊に出てみよう。中庭で『蹴鞠（けまり）』ができる!!蹴鞠は鹿の皮を使って作られていて、ちょっと硬いかな？受付にあるから気軽に触れました。実際に蹴鞠を体験する時は練習用のボールを使用して、右足の甲だけを使うみたい。「アリヤーアリ」と掛け声もあっておもしろい！落とさないように相手に返すのがむずかしい。その横には杖みたいなのがある『毬杖（ぎっちょう）』です。木の幹と枝部分で作った自然の形を活かして杖が作ってあるよ。木の玉を打ち合って遊ぶみたい。これくらいなら !!めぇめぇもできるかな。貴族が履いていた『浅沓（あさぐつ）』も体験できる。浅沓はめぇめぇサイズがないよ～またまた残念。蹴鞠や毬杖は自分の靴を履いて体験しよう。今日紹介したのは全部無料で楽しめる体験です。めぇめぇは3歳だけど、大人まで楽しめる楽しい体験ばっかりだったよ。

他にも予約すると、本格的な十二単などの平安装束の試着体験をすることができるし、古代の技術に触れてみることができる機織り（はたおり）体験でコースターやランチョンマットなどオリジナルの作品づくりも楽しめるよ。あれもこれも体験したいめぇめぇは1日中体験館でふらふらしちゃった。えへへ楽しかったよ。みんなも遊びに来てね。

いつきのみや歴史体験館

三重県多気郡明和町斎宮3046番地25
TEL.0596-52-3890
ホームページ　http://www.itukinomiya.jp/
【入館料】無料　【開館時間】9：30～17：00
【休館日】月曜日（祝日の場合を除く）、祝日の翌日、年末年始
【交通案内】近鉄斎宮駅下車すぐ　伊勢自動車道玉城ICより約20分

斎王讃歌

木戸口真澄

伊勢神宮の遷御の儀も終え活気に湧く伊勢に天皇・皇后両陛下が起こしになられました。

三月二十七日、お揃いで斎宮歴史博物館を御見学になり、町民こぞって熱い思いを抱きお迎えしました。

両陛下の慈愛に満ちた「ほほえみ」に接し感激している人々が見受けられました。

斎宮の弥生明りに御幸かな　真澄

弥生の花霞になびく「いつき」の野に佇み瞼を閉づると「貝合わせのあそび」に倦きられたのであろうか、斎王さんと、それに従う女官たちの華やかな散策の姿が見られます。

祓川の瀬音も幽かに聞き、正しく平和そのものの理想郷、桃源郷に見受けられます。

しかし斎王さんは、皇族という恵まれた環境に育ち申し分ない御身分であられるが、決して幸運の人ではなかったと推測されます。

宮廷の権謀術数の渦中にあって、悲運の生涯を送られた方々が多い様です。

亀甲の占いで定められたと云われていますが、権力闘争の勝利者ではなく、むしろ弱い立場の方が、都から遠く離れた伊勢の地に赴かれ悲傷の涙を流されたと思われます。

王朝史即殺戮史文化の日　真澄

しかし斎宮の地に於いては

斎王に殺戮は無し千草濃し　真澄

女流社会の高い文化・藝術の花開く地であったことでしょう。

春夏秋冬・斎宮は花が咲き満ち、鳥語も絶えず、日本の原風景をそのまま今の世に受け継いでいることを誇りにしても良いと思います。

われ生れし村は斎宮白桔梗　真澄

まぼろしの斎王と逢う若菜の野　真澄

国史跡の指定から三十五年、まだまだ解明されない「幻の宮」らしい未知の分野がありそうです。

謎は謎としてロマン性がありますが、すべてを悉知したいと思うのも人間であります。

今年も斎王まつりの季節が近づいて来ました。

いつきの野に竜笛ひびく祭かな　真澄

伊勢みちは斎王みちや野菊濃し　真澄

『小町』の配役は・・・身の廻りの『お世話役』です。

ここ数年、斎王まつりの舞台上から舞台裏まで、あらゆる場所で若い女性たちが元気に活動している姿を見かけた方も多いのではないでしょうか。

彼女たちの正体は、出演者OG会『小町』。

全員が斎王役や女官役などで斎王まつりに出演した経験を持っています。

2011年「斎王まつりをもっと盛り上げたい」と有志数名により発足し、現在メンバーは約20名。

当初はまつりの運営補助を主な活動内容としてきましたが、人目を引く華やかさが話題となり、まつりの枠を超えて明和町のPR活動や各イベントなどにも引く手あまたの状況です。

昨年の4月から明和町観光協会に所属し、観光大使のような役割も担っていくとは思いますがもちろん斎王まつりでも、今まで以上に活躍してくれることでしょう。

『小町』とは、斎王まつり女性出演者として得た貴重な経験を、これからの斎王まつりの企画・運営に反映させ、より素晴らしいイベントに高めていきたい!!という強い想いが形になった有志の会です。

出演者として感じたたくさんの想いを発信することから始まりましたが、今では出演者の身の廻りのお世話やまつりの補佐を務められるようになりました。

斎王まつりでは、白装束やオリジナルTシャツを身にまとい、「笑顔いっぱい!!」活動しています。

図書の紹介

私達の「斎宮」についてより多くのことを知っていただくために
ー地元で読める斎宮関係図書のご紹介ー

凡例
◎ふるさと会館（図書館）で貸出可　○ふるさと会館（図書館）で閲覧可
☆いつきのみや歴史体験館・博物館ミュージアムショップで販売
◇斎宮歴史博物館図書ホールで閲覧可

「斎宮」の入門書として	谷口布有緒文　里中満智子画『斎王ロマン　都わすれの詩』明和町◎☆ 中野イツ著『斎宮物語』明和町◎☆ 山川修司著『語り部の竹の斎王語り』近代文芸社◎☆◇ 榎村寛之著『伊勢斎宮と斎王』塙書房☆
郷土の歴史として「斎宮」を知りたい方に	奥井宏忠著『別れの御櫛ー斎の宮と斎宮寮』光書房○◇ 明和町教育委員会編『郷土史に見る斎王』◎◇ 三重の文化財と自然を守る会編『伊勢斎王宮の歴史と保存』○◇ 『同Ⅱ』◇
斎王一行の旅した「群行」の道を歩いてみたい方に	田畑美穂著『斎王のみちー伊勢斎宮の文化史ー』中日新聞本社○◇ 村井康彦監修『斎王の道』向陽書房◎☆◇
「斎王」を小説で読んでみたい方に	内田康夫著『斎王の葬列』角川書店◎◇ 池田美由喜著『鷺草ー大津皇子とその姉とー』新風舎◇ 郡俊子著『倭姫宮の御巡行』勢陽文芸◎◇ 〃　『伊勢斎王の恋』近代文芸社◎◇ 〃　『哀しみの伊勢大来斎王』近代文芸社◎◇
「斎宮」や「斎王」について考えてみたい方に	津田由伎子著『斎王』学生社○◇ 山中智恵子著『斎宮女御徽子女王ー歌と生涯ー』大和書房◎◇ 〃　『斎宮志』大和書房◎◇ 〃　『続斎宮志』砂子屋書房◎◇ 〃　『斎宮箚記』砂子屋書房◎◇ 所京子著『斎王和歌文学の史的研究』国書刊行会◇ 〃　『斎王の歴史と文学』国書刊行会◇ 榎村寛之著『律令天皇制祭祀の研究』塙書房◇ 中川ただもと著『斎宮和歌の解釈と鑑賞』紫明の会☆ 服藤早苗著『歴史のなかの皇女たち』小学館☆

第32回（平成26年度）斎王まつり実行委員会組織体制

本部	代　表	土井　祐治	名誉会長（町長）　中井　幸充
	副代表	笛川　浩	顧問　木戸口眞澄　西場信行　浜井初男　伊藤久美子　北岡　泰
	副代表	岩佐康則	辻　正信　辻　丈昭　東谷泰明　山川充造
	副代表	森田　均	
	副代表	森菜津子	相談役　辻　孝雄　北村純一　橋本久雄　東谷泰明　森島啓之 西川道子　渡邊幸宏　森下　清　田中　貢
	事務局	山中いずみ	
会計監事	朝倉惟夫	久世　晃	
	任務分担の内容		9
総務・財務班	総務の実施 財務の実施 ｸﾞｯｽﾞ販売・ｽﾀﾝﾌﾟﾗﾘｰ等 斎王市の実施	◎森下　清	○堀木茂生　竹内克巳　大西俊次郎　辻　孝雄　中川裕正 西村直克　森島啓之　田中真司　田中　貢　小林順一 田端正俊　奥山幸洋　野田節雄 14
会場班	着付会場内の管理 出演者の移動 記念写真	◎東谷泰明	○北川和樹　石田豊喜　澤　恒一　中瀬正実　橋本久雄 小山千綴 7
着付班	着付け準備と後片付け	◎新田一子	○清水清子　○田中政子　○西宮幸代　衣斐喜代美　竹内　喜子 菊矢照子　安井澄代　夏井ちはる　服部益子　新谷千恵子 中村真朱美　西村弘子　森本さちこ 14
まつり実施班	前夜祭の実施 禊の儀の実施 出発式の実施 群行の実施 社頭の儀の実施 ｱﾄﾗｸｼｮﾝの実施	◎関岡武夫	○北村哲也　○早川潤一　○中西修一　北岡　泰　永島せい子 石田藤生　伊串金市　北山房夫　小林邦久　佐々木久夫 東谷泰介　西岡信行　長谷川新　辻　満寿美　中島　宏 市野秀世　秋山修一　伊藤佳史　三浦邦昭　辻　正 乾　健郎　間宮一彦　八田明美　下村幸一　野上但治 井上直子 27
広報班	ポスター・パンフレット原案作成 広報・宣伝事業計画	◎山内　理	1

敬称略・順不同（◎は班長　○は副班長）　平成26年4月19日現在

準備作業

第31回（25年度）斎王まつり実行委員会活動報告　（敬称略）

1月17日(木) 会計監査
　26日(土) 役員会
2月　1日(水) 総会・総務班会議
　9日(金) 本部役員会
　10日(日) 出演者募集締切
　17日(金) 役員会(出演者書類選考)
　20日(水) 着付け班　着物整理
　24日(日) 「梅まつり」協賛(斎宮歴史博物館)・絵馬奉納の儀(竹神社)
3月　3日(日) 子供説明会(子ども斎王抽選　中央公民館)
　5日(火) 役員会(選考会について)
　10日(日) 斎王役選考会(いつきのみや歴史体験館)
　14日(木) 実施班会議
　15日(金) 梅まつりフォトコン選考会
　18日(月) 斎宮跡課打ち合わせ(気球について)
　24日(日) FM三重「来て、見て、明和」28代斎王 松本　29代斎王 古川
　　子ども斎王 神農　出演
4月　4日(木) ファミング取材(事務局対応)
　　広報班会議
　12日(金) 広報班会議
　　斎王市会議(研修室)
　15日(月) 観光ガイドマガジン「コンパス」主催対談　(博物館にて 土井代表・斎王 古川)
　　夕刊三重取材(斎王　古川)
　18日(木) 第1回アトラクション会議
　21日(日) 作業　(竹切り・のぼり準備・ポールチェック)
　22日(月) 自治会長会議　代表　出席
　23日(火) 三重テレビ「とってもワクドキ」出演(土井代表・斎王　古川)
　26日(金) 全体会議
　27日(日) 葦舟製作・三重テレビ収録
5月12日(日) 出演者説明会・ステージ道具製作・準備物　現場搬入
　13日(月) 三重テレビ「旬感三重」出演(土井代表)
　14日(火) 名古屋テレビ「どですか」出演(内侍役　大辺・実行委員)
　16日(木) 第2アトラクション会議
　19日(日) 午前・のぼり立て着付け教室
　　午後　子ども出演者説明会・ステージ組み立て
　　FM三重「きて、みて、明和」出演(実行委員・小町)
　21日(日) 知事表敬訪問
　22日(水) 三重テレビ「はぴ3」出演(土井代表)
　24日(金) 最終全体会議・三重テレビ「とってもワクドキ」出演(斎王　古川)
5月26日(日) ステージ作り・KBS京都ラジオ出演(第23代斎王　安田)
　28日(日) さわやか福祉専門学校と打ち合わせ
　29日(水) 衣裳準備
　31日(木) FM三重ラジオ出演(事務局)
6月　1日(土) 前夜祭
　2日(日) 斎王まつり
　9日(日) 片付け・打上・衣裳整理・反省
　28日(金) 役員会(反省会)
7月　5日(金) 中京テレビ「キャッチ」出演　(斎王　古川)
　9日(火) 伊勢まつり会議　土井代表出席(伊勢市役所)
　12日(金) フォトコンテスト応募締め切り
　17日(水) 着付け班　衣裳整理
　22日(月) フォトコンテスト1次審査
　26日(金) 役員会(フォトコンテスト入選・入賞作品選考)
　　応募者71名　応募作品175点
9月　6日(木) 役員会
　8日(日) 第31回斎王まつりフォトコンテスト表彰式
　　第31回斎王まつりフォトコンテスト入賞・入選写真展
　　(斎宮歴史博物館にて9月23日まで)
　13日(金) 臨時総会
　21日(土) いつきのみや「浪漫まつりと観月会」協力(斎王役 古川・女官役一人)
　27日(金) 役員会　(伊勢まつりについて)
　28日(土) 東京「三重テラス」オープニングイベント(斎王役　古川・代表出席)
10月13日(日) 伊勢まつり　斎王群行
　20日(日) 視察研修　京都野宮　「斎宮行列」
11月　1日(金) イオン明和　リフレッシュオープニングイベントにて
　　FM三重「あつとえりかの元気のでるラジオ」出演(斎王役　古川・事務局)
　　役員会
　21日(木) 役員会
　28日(木) 来訪者アップ連絡会議
12月　1日(日) 第32回斎王まつり出演者　募集開始
　2日(月) 伊勢まつり反省会　代表出席
　6日(金) 本部・広報・実施班合同会議
　7日(土) ざいしょ市　着付け体験
　19日(木) 梅まつり会議　土井代表・事務局出席
　　本部・広報班会議
　26日(木) 事務所仕事納め

群行衣裳

長奉送使【ちょうぶそうし】

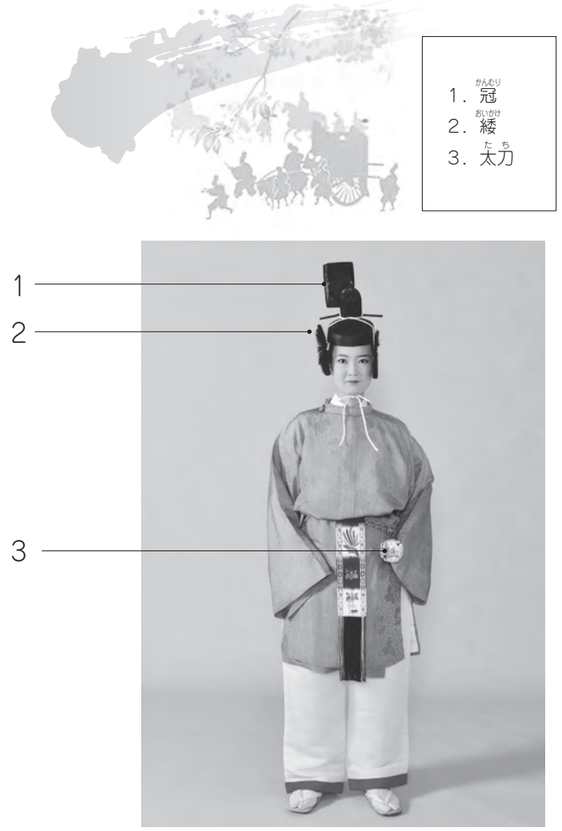
監送使ともいう。斎王一行を伊勢まで送り届ける群行の最高責任者。沿道における警察権が与えられており、任を終えると直ちに帰京しました。

検非違使【けびいし】

平安時代から室町時代にかけて京中の警察を担当した職。元来、平安京の治安維持は京職や衛府の任であったが、特定の官人に京中の警察を担当させることがあり、それが検非違使となり、やがて衛府や京職・弾正台などの権限を吸収し、王朝国家有数の警察機関となったのである。

看督長【かどのおさ】

検非違使庁の下級職員で、身分は火長。弘仁式制では左右それぞれにつき二人と定められ、貞観・延喜式制に継承されているが、その後次第に増員され、長元八年（一〇三五）の『看督長見不注進状』（『平遺』五二九～三七）では左右合わせて十五人を数える。獄直や犯罪の捜査・追捕等を任務とする。尉を中心として編制される警察部隊の一員として出動することがあるが、単独ないし少数の従者を率い、事に従うことが多い。しばしば行き過ぎた捜査や追捕を行い、京民から頼りにされる一方で、恐れられもした。その武力は悪鬼魔神を慴伏するという信仰を生み、『徒然草』二〇三には主上御悩の時、五条の天神に看督長の靫をかけることが見え、『神道名目類聚抄』には守門の神を看督長と称したとある。



1. 冠
2. 綾
3. 太刀

随身【ずいしん】

随身とは、貴族が外出する際に警護にあたった近衛府の官人を指します。それには高い教養と優美な美貌が求められたと云います。

駕輿丁【かよちょう】

斎王の乗る輿（葱華輦）を担ぐ人です。

斎王【さいおう】

天皇の即位ごとに、未婚の内親王（天皇の娘）あるいは女王（天皇の兄弟の娘など）の中から占いで選ばれ、天皇の譲位や崩御、あるいは肉親の不幸などにより解任されて、都に帰る決まりになっていました。伊勢神宮の祭りには、六月・十二月の月次祭と九月の神嘗祭に関わるのみで、ふだんは斎宮の中で都と同様の生活を送っていたものと考えられています。

古代から中世にかけての文学作品に登場する斎王も多く、『源氏物語』『伊勢物語』など、多くの文献に残されています。

十二単【じゅうにひとえ】

十二単とは近世になってからの呼び名で、正しくは女房装束、または裳唐衣といいます。単衣の上に袿を重ね、打衣、表着の上にベストのような唐衣をはおり、腰には前部のないプリーツスカートのような裳をつけます。貴族の女性の晴の衣裳（正装）です。

髪は垂髪、作り眉。上衣は、上から順に唐衣、表着、打衣、袿、単となっています。唐衣は衽、衿合わせがなく、上からはおります。表着は上の御衣とも呼ばれる垂領広袖の袷仕立てです。打衣は砧で打って光沢を出したところからこの名があります。形は表衣と同じで紋様はありません。袿は、内衣の意味で、垂領、広袖の袷仕立てで地紋があり、数枚重ねて用います。単は袿と同形ですが、裄、丈ともに長く、単仕立てで裾はひねり仕立てになっています。下衣には袴と裳をつけます。袴は緋の長袴（若年未婚は濃色）、裳は背にあてて結び、後に長く垂らして引きます。

1. 垂髪　2. 唐衣
3. 表着　4. 打衣
5. 衣（袿）（枚数を重ねている）
6. 単　7. 長袴　8. 裳（全体）
9. 裳の小腰　10. 裳の引腰
11. 檜扇（衵扇）　12. 帖紙
13. 日陰の糸（玉かずら）

※斎王が付けていたかどうかは定かではありません。

内侍または命婦【ないし または みょうぶ】

斎宮で働く女官たちの最高責任者として、乳母や女孺の上にいる立場にありました。

女別当【にょべっとう】

内侍や宣旨が、斎王の住むエリアで公的性格をもつ仕事をこなす女官であるのに対して、乳母のように、斎王のプライベートな「宮家」としての用向きを担当していたのではないかと考えられますが、詳しいことはわかりません。

乳母【めのと】

母親に代わって養育を受け持つ女性で、斎宮には、斎王個人の「家」に仕える存在として、二名ないし三名が務めるようになっていました。

女孺【にょうじゅ】

「めのわらわ」ともいう女官で、一等から三等に分かれており、それぞれに課せられた実務を担当していました。

采女【うねめ】

都では、地方の郡司の娘から選ばれ、天皇の御前などに奉仕していました。しかし、斎宮に采女がいたかどうかについてはよくわかっていません。

童・童女【わらわ・わらわめ】

都の官人が、家族で斎宮に赴任したということも考えられますから、その子供達が斎宮内に住んでいたという可能性はあります。しかし、群行の一員として加わっていたということはなかったようです。

第三十一回　斎王まつり

斎王フォトコンテスト

斎王賞

「心遣い」　松阪市　阿部 道男

町長賞

「禊の儀式」　鈴鹿市　長島　隆

明和町教育長賞

「斎王現れる」　津市　藤高 文男

明和町議会議長賞

「前夜祭の斎王」　松阪市　萩原　伸

斎宮歴史博物館長賞

「さあ、こちらへ」　四日市市　酒井 雅司

特別賞

「葦舟と斎王」　松阪市　後藤 和久

特別賞

「雅楽群行」　志摩市　山本 幸平

特別賞

「厳粛にきらびやかな儀」　鈴鹿市　髙木 一郎

特別賞

「灯りを浴びて」　鈴鹿市　榎本 清司

特別賞

「晴れの笑顔」　明和町　梶尾　豊

フォトコンテスト

◆**サイズ**
・カラーまたは白黒作品でサイズは四つ切のみ。

◆**応募締め切り**
・平成26年7月18日(金)当日消印有効
(郵送中の事故、破損については責任を負いかねます。)

◆**応募方法**
・応募票を作品裏面に貼付、郵送または斎王まつり事務所受付。

◆**応募上の注意事項**
・応募作品には、応募者本人が撮影したもので一人2点以内(未発表の作品)に限ります。
・応募票の各項目に楷書で記入し、題名・お名前にはかならずフリガナをつけてください。
(複数応募の場合はコピーしてください。)
・入賞、入選作品については、あらためてデーターをお借りすることがあります。
・パンフレットやポスター、ホームページなどへの使用権は主催者に帰属します。
・応募作品のご返却はいたしません。

◆**賞**
・入賞は、10賞(斎王賞ほか)、入選は10作品

◆**選考方法**
・作品は斎王まつり実行委員会で選考いたします。

◆**発表**
・8月上旬に入賞者にのみ直接通知いたします。

◆**応募先**
斎王まつり実行委員会「フォトコンテスト」係

◆応募・問い合わせ先
〒515-0321
三重県多気郡明和町斎宮2811番地
斎王まつり実行委員会事務局
電話　0596-52-0054
FAX　0596-52-7274

第29代斎王役
古川　みゆき

斎王役を務めて

初めて十二単衣に袖を通してから、あっという間にこの日を迎えました。

斎王まつり当日は心配されていた雨もなんとか持ちこたえ、無事に開催することができました。

当日、着付けをして頂いている際、これからついに出発の時を迎えるのだという気持ちが湧き上がり、実際の斎王さんも何百年も前にこのような思いで鮮やかな十二単衣に袖を通していたのだろうと思うと感慨深いものがありました。

数少ないリハーサルの中で、何度もみんなで確認、練習して迎えた前夜祭。

ステージ奥の御簾越しにうっすら見える出演者たちの姿に「頑張って。練習通り。」と緊張しながら願っておりました。

そして最後に御簾が上がり、光の中を前へと一歩一歩進んだ時の緊張と高揚と感動は今でも鮮明に覚えています。

二日目の斎王群行ではたくさんの方がお声をかけて下さり、重い着物と暑さを忘れるくらいの笑顔と元気を頂けました。

当時の斎王さまが故郷を離れて斎宮という新たな地に到着した時どのような心境であったのか…

実際の遠路よりはるかに短い旅ではありましたが、葱華輦（そうかれん）に揺られ、たくさんの方の笑顔といつきのみやの景色を見て、ほんの少しそのお心を垣間見たような気がしました。

この伝統ある、地元の方々に愛された素晴らしいお祭り、「斎王まつり」

今後の更なる発展を願っています。

子ども斎王
神農　ありさ

子ども斎王を務めて

家族に勧められて応募した斎王まつり。決まったときはうれしさと共に不安も押し寄せてきました。

当日は何もかも初めてで困ったときに出演者の方が優しく接してくれました。

私は乗り物酔いをするので葱華輦（そうかれん）に乗るときは心配したのですが、皆さんの暖かい笑顔で迎えてくれたお陰で楽しく群行が出来ました。

斎王の名前も知らなかった私が、斎王を体験してその歴史に触れ合うことが出来たことはとても貴重な時間でした。どうもありがとうございました。

葱華輦復元模型（斎宮歴史博物館蔵）

よみがえる平安の都　斎宮

斎王まつり実行委員会 代表　土井祐治

今年は、第三十二回目の開催となり、サブタイトルに「よみがえる平安の都斎宮」を掲げます。

この斎宮跡に、「正殿」「西脇殿」「東脇殿」が当時の建築様式にならって本年度に着工されます。

この事業と並行して、明和町では斎宮跡を核とした地域活性化と、歴史・文化、観光資源を活用したまちづくりも計画されており、斎宮跡の発展に大きく寄与される事と思います。

この斎王まつりは、みなさんのご支援ご協力を頂き開催されています。実行委員も一丸となり、平安の雅の「まつり」をめざして、三十二回目も成功するように頑張ります。

全国からたくさんの人々が、この斎宮に来て頂き、初夏の風が吹き、野花菖蒲の花が咲き誇る「いつきのみや」に集い、素晴らしい「斎王まつり」になりますように願っています。

三重県観光キャンペーン
2013.4～2016.3

主催／斎王まつり実行委員会

後援◎三重県、明和町、明和町教育委員会、明和町観光協会、斎宮歴史博物館、（公財）国史跡斎宮跡保存協会、（財）民族衣裳文化普及協会、中部運輸局三重運輸支局
近畿日本鉄道株式会社、NHK津放送局、三重テレビ放送（株）、三重エフエム放送（株）、松阪ケーブルテレビ・ステーション（株）
問い合わせ◎斎王まつり実行委員会事務局　TEL.0596-52-0054　FAX.0596-52-7274

http://saioh.jp　　定価100円　　再生紙（古紙100%）を使用しています。